

108年の幸せな孤独

キューバ最後の日本人移民、島津三一郎

著者：中野健太 発行：角川書店 定価：1700円＋税

吉田太郎 フィデル・カストロのファン



虫の眼で草の根からキューバや世界のありようを浮き彫りにした快著

この1月に小生の友人、中野健太氏の日系移民から見たキューバの著作が上梓されましたので紹介させていただきます。中野健太氏は高校生のときに初めてキューバを訪れて、英国の大学を卒業した後、キューバの映像制作会社で学び、フリーランスで番組を作っているというユニークなキャリアの持ち主です。

http://www.asianews.co.jp/nakano_top.html

氏は、2008年にテレビ朝日で放映されたドキュメンタリー「幸せの指標-世界が目指すキューバ医療」を製作されていますが、本書は、番組づくりで登場した日系移民の最後の存命者、島津三一郎氏の取材を中心に、他の日系人の子孫や高校のときからのキューバの友人の日常を軸に、鳥瞰図とは正反対に虫の眼で草の根からキューバや世界のありようを見事に浮き彫りにした快著です。

話が飛びますが、『この世界の片隅に』というアニメ映画が静かな人気を呼んでいます。東洋一の軍港、広島県の呉に嫁いだ「すず」という女性主人公の戦前から戦争中にかけての日常生活がひたすら描く中で、戦争の悲劇と平和の大切さがしみじみと伝わってくる名作です。

広島が舞台となるだけに、ハイライトは原爆投下となりますが、その悲劇もただ遠くにキノコ雲が見え、広島からのラジオ放送が突然途切れるというシーンだけで描かれます。その後、すずは、廃墟となった広島の実家を訪ね、この世界の片隅で自分を見つけてくれた夫に感謝しながら、戦災孤児の少女を連れて呉に戻るのです。

もともと広島出身の漫画家、こうの史代さんの原作を映画化したものですが、映画を作ることに感動した市民も昔の写真をもちよったりして、原爆投下前の失われた広島的光景のディテールがアニメ上で再現されていきます。草の根の市民も参加した新たな反戦・反核映画とも言えます。

広島といえば、チェ・ゲバラもフィデルも訪れており、

とりわけ、核の廃絶を願ったフィデルにはこのアニメは見ていただきたかったのですが、

中野氏の著作は、この映画『この世界の片隅に』を想起させます。

時代に翻弄される主人公、島津さんとサブ主人公であるキューバの友人の運命を通して、キューバ革命、経済封鎖、そして、スペシャル・ピリオドとキューバ革命の理想の光と陰が静かに伝わってきます。読者は登場人物に我が身を重ねながら、この世の不条理と日常での思いやりの大切さを痛感するに違いありません。

キューバの無料の教育と医療は良き社会を作る鍵

さて、フィデルと並ぶ偉人であるダライ・ラマ法王は「私は社会主義者である。利己主義的な資本主義のもとから格差社会と環境破壊には未来がない。慈悲の精神に基づくケアエコノミーが必要だ」と語られています。

中野氏の本のタイトルにも入っている「幸せ」の著作でも有名なダライ・ラマの弟子であるチベット僧、マチウ・リカール博士(元フランス出身の化学者)は、最新著作「利他主義」で、こう語っています。

「最新の多くの研究事例から示されているように、利他主義は個人レベルで磨くことができ、社会レベルで奨励することができます。学校において、協力、連帯、慈悲、非差別等の利他主義的な態度を重視した教育を行うことは無意味ではありません。ケアを統合した経済開発を想定することは、単なる理想主義ではありません」

キューバの無料の教育と医療は良き社会を作る鍵だ、と中野氏は最後に著作で訴えますが、2年以上のキューバ滞在と取材をふまえ、キューバの欠点も見据えたうえでこの結論には重いものを感じます。そして、この氏の見解がチベット仏教や最新の脳神経科学からの知見と重なるのも一興です。